

ウフチユン 大中断

首里の中心に位置するまち

首里の中心地として、上流士族の屋敷街だった大中。戦前までは大きな屋敷構えが建ち並ぶ、王都の雰囲気を残したまちだったといわれています。現在も残るスージ道（細道）をたどりながら、様々な旧跡をたどってみませんか。



蔡温らによる風水見分
『球陽』によると、一七二三年（康熙五二）、毛文哲、蔡温らによって首里城・玉陵などの風水見分が行われました。その際、首里にある重要な御嶽、林樹についても所見が加えられています。その中で、仲里御嶽の地は大変良く、大中の「石ヌチジ」は山脈を結ぶ所なので土を傷つけない、石を破壊せず、木を植えてその地力を助けるべきであると鑑定されています。

のシンボルとして今後の跡地利用が注目されています。

●羽地朝秀旧宅跡

大中町を代表する歴史的な偉人は羽地朝秀（一六一七～一六七五・中国名を向象賢）です。首里王府の最高職である「摂政（せつせい）」につき、一六〇九年（万曆三七）の島津侵入以降の疲弊した琉球社会に政治改革を打ち出して王国をたてなおした人物です。また、琉球最初の正史である『中山世鑑』を編纂しています。羽地の行った改革はその後、蔡温に引き継がれ、近世琉球社会の体制が整っていきます。彼の生まれた羽地御殿跡には、現在解説板が設置されており、その足跡にふれることができます。

●仲里御嶽

「首里大あむしられ（神女）」が管轄する御嶽のひとつ。西の大御嶽と東の小御嶽からなり、「首里古地図」にも石垣に囲まれた大小の御嶽が描かれています。戦後の米軍の碎石採取や宅地開発などで破壊の恐れがあったため、ふたつの御嶽を合祀し、現在地に移転されました。移転後も大中町の自治

●大中大石跡

カーミシマシ坂、大中坂、赤土毛道の交差する地点にあった大きな岩。これら三本の道は大中大石を中心に小さなロータリーをつくり、各道に通じていました。一六五四年に琉球石灰岩を開削して街路を開いた時に粉碎せずに残ったもので、付近は蔡温によって風水見分が行われています。戦後の碎石や宅地開発等で現在は残っていないため、戦前の写真のみがその状況を伝えていきます。



▲「首里古地図」にみえる仲里小嶽（右）大嶽（左）
沖縄県立図書館所蔵

耳切坊主の昔話

「うふむらうとうんぬ、かどうなか。耳ちりぼーじぬ立っちゃんど（大村御殿の角中で耳無小僧が立ってるよ）」
沖縄の人々なら聞いたことのある「耳切坊主」の童歌。龍潭を望むこの一帯はこの歌が生まれた場所です。
中城御殿が移転する以前、この地は大村御殿の屋敷でした。耳切坊主は、もとは黒金座主（クルカニジャーシ）という妖術を使う怪僧です。黒金座主は悪事が多いため、尚敏王の命令を受けた大村御殿の主人・北谷王子が、座主の耳を切り落として退治します。しかしその後、屋敷の角に耳の無い坊主の亡霊が立つようになり、北谷王子の家では、男の子が生まれると早死にするということが続きました。そこで、「男の子が生まれたら、大女子（うふいなぐ）が生まれるようになったらさうです。現在では泣く子をあやすときの子守歌としても歌い継がれています。

水のある風景

琉球王国時代、首里城から島尻・中頭・国頭へ宿道（国道）がそれぞれ通り、番所（現在の市町村役場）から番所へと結ばれていました。浦添への宿道は、龍潭の北側崎馬場から安谷川御嶽を通り、浦添番所へ通じていました。安谷川は、安谷川坂の途中にあります。このカー（井戸）は、長方形に1mほど掘り下げられ、周りの石積みは「あいかた積み」になっています。水汲みの広場は、石敷きになっていました。
窪地のため排水は、石造り暗渠を通り川に流れるようになっており、当時の石工のすぐれた技術が伺い知れます。
十五世紀中ごろの「屋良くわいにや（クエーナ）」にも語られていることから、古の時代からこのカーがあったことがわかります。地域の共同井戸として、また行き交う旅人の喉の乾きを潤した歴史を感じます。



有限会社 玉那覇味噌醤油
那覇市首里大中町 1-41 ☎098-884-1972
http://www.tamanahamiso.co.jp/

老舗ならではの心意気が息づく味噌

歴史を感じるとっしりとした杉樽の中で、熟成を待つ褐色の味噌。玉那覇味噌醤油の歴史は安政年間、尚泰王の時代に始まります。二代目の玉那覇有宏氏が現在の場所所創業し、大阪高専で醸造学を学び、石炭を利用した本格的な醸造を開始。沖縄の味噌工場で先進的な存在でした。



歴史ある工場と手作業が味の底力

レンガ煙突の跡が残る工場は、隣家が迫る立地でありながら、石垣の上に板張りをし風通しをよくしています。自然風によって室温を三十度に保った箱の中で米麴をねかし、その後国産米と丸大豆、泡瀬の島マースで仕込み、杉樽の中で発酵させます。すべて熟練の職人の感覚を頼りに、半年の時を経て独特の風味と味わいに育て上げられるのです。

伝統の味を まちづくり・人づくりへ

「王朝味噌」（一〇五〇円 七五〇グラム）と一般的な味噌との違いは、お椀からふわっと立ち上るふくよかな香り。天然醸造ならではの力強い香りとコクを生み出すため、今日も百五十年来の手作り製法を守り、少量生産で体によさ

士族の風雅な暮らしがうかがえる「仲田殿内」

玉那覇味噌醤油の工場の敷地は、羽地朝秀家（旧宅）跡の隣にあり、「仲田殿内」の屋敷跡に位置しています。敷地内には椿の木や池を配した小さな庭園があります。井戸は一本の水源から出口を二つに分けた男女別の水浴び場で、男性用の「男水」が丸型井戸に、女性用の「女水」は厚い石の堀で片面を囲み、しゃがむと姿が見えないようにつくられています。

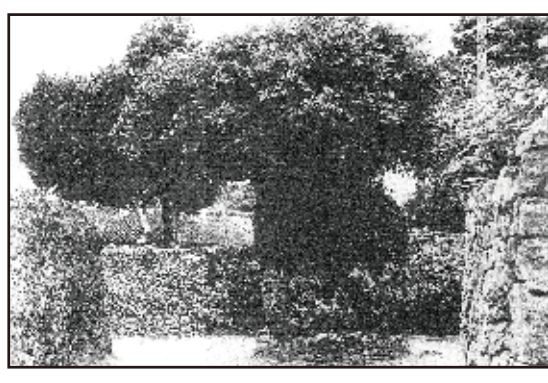
※仲田殿内の一般公開はしていません。



（撮影・小倉英三郎 オリエンタルホビィ）



仲里御嶽



▲大中大石
那覇出版社発行「写真集沖縄」より